

ほん、むねつくり 座光寺の本棟造～江戸時代の格式高い建物～

座光寺には「本棟造」と呼ばれる建物が約10棟、飯田市では約150棟残っています。本棟造は日本の中でも長野県の中・南部にしか存在しない建物で、風土にあった美しい建物です。

本棟造は江戸時代中期頃（約300年前）から建て始められました。江戸時代の座光寺の人がどんな家に住んでいたのかみてみましょう。

本棟造の特徴は？

建物全体は、正方形の一階に、二つ折りの屋根（切妻造という）をのせた、ちょうど折り紙を半分にしたような形をしています。屋根に「雀踊り」という飾り物や、二階に格子窓をつけて美しく装飾しています。

南信の本棟造の多くは、表側の二階が一階よりも張り出す「土庇」になっていて、雨の日の農作業場所として便利です。

本棟造の間取りは？

本棟造の基本的な間取りは、ほぼ正方形の一階を「井」の字に9つに分けた形をしています。

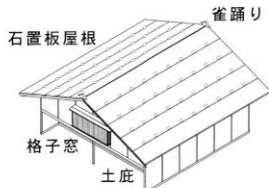
片側に農作業をする広い土間があり、その奥にいろりのある「おかつて」があります。これは今でいう台所です。部屋は6室に分かれ、表側には客間として使う床の間がついた「座敷」があります。真ん中2室は普段生活する居間で、裏側2室は主に寝室と物置でした。

二階は、古い時代の本棟造では狭い屋根裏部屋が表裏に2室ありましたが、明治時代に養蚕を二階で行うようになり、二階を広く作るよう変化していきました。

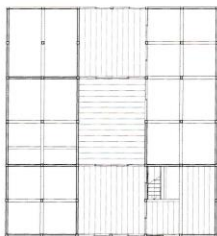
今の家とくらべると？

本棟造と現在の住まいをくらべると、下にあげるような大きな違いがあります。

- ・廊下がない
 - 一別の部屋を通らないと奥の部屋には行けません。
 - ・壁がない
 - 一部屋と部屋の間に壁がなく、障子やふすまで仕切っています。
 - ・「うまや」がある
 - 一昔は家の中に運搬や農耕のための馬や牛がいました。
- その他の違いも探してみましょう。



本棟造の横断面と各部名称



基本的な本棟造の間取りの例

1872年（明治5年）移築 正木家（下羽場）

上：二階平面図 下：一階平面図

本棟造の見どころは？

本棟造の中に入ると、太くて長い木材をたくさん使っていることがわかります。大黒柱と呼ばれる家の中心にある太い柱は20～30cmあります。また10mを超える長い木材（梁という）を使って二階を支えているものもあります。

家の正面を見ると、曲がった木材を2つに割って左右対称に使っている装飾性豊かな本棟造もあります。

100年以上前の大工さんの工夫や苦労を今でも見ることができます。

家は移動する？

明治時代頃（約100年前）までは、いらなくなった家を解体して、新しい場所へ持って行き、組み直して建てる「移築」を行いました。だいたいの本棟造の2～3割は移築されて建てられています。

また建物全部を移築できなくても、材料を何度も「転用」して使いました。昔はそれだけ木材を大切にしていました。

今でも本棟造は建てられている？

本棟造は約300年間の歴史がありますが、今でも建てられています。それだけ愛着のある建物なのです。

ただ、最近の本棟造の特徴は、入り口（玄関）が中央にあること、土間がないこと、間取りが住みやすいように複雑であること、屋根が急であること、奥行きがないことなどがあります。

身近な本棟造を探してじっくり見学してみましょう。

（金澤雄記）



2つ割りの木材を左右対称に使う本棟造
1863年（文久3年）建築 竹内家（原）



座光寺で一番古い本棟造
1716年（正徳6年）建築 北原家（穴野）



新しい本棟造
1964年（平成6年）建築 北原家（宮の前）

豆知識 石置き板屋根

座光寺の昔の建物のほとんどは、瓦やタタンが手に入る前は石置き板屋根でした。かまぼこ板より大きい板を順番に重ねて、風で飛ばないように竹と石をのせて押さえるだけの簡単な屋根です。石や板が落ちないように屋根の傾きがゆるいことが石置き板屋根の特徴です。

ただ板は傷みやすいので、約10年に1回は板を取り替える必要があります。雨が降れば雨漏りが大変でした。



復元された石置き板屋根
1799年（寛政11年）建築 竹ノ内家（高森町）